

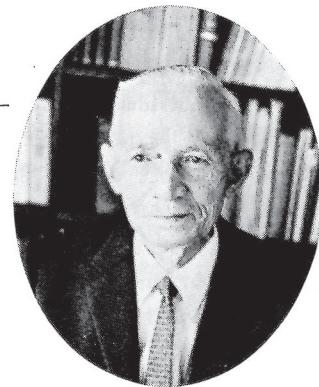
## 学会史

### 日本応用心理学会のあゆみ（その2）

——増田幸一先生にきく日本応用心理学会のことはじめ——

MEMOIR ON THE HISTORY OF THE JAPAN  
ASSOCIATION OF APPLIED  
PSYCHOLOGY (2)

Koichi MASUDA



堀内(敏夫) 応用心理学会成立の頃のいきさつについては、ほとんど何も知らない状態といえます。今のうちに、長老の先生がたに当時のお話をうかがいし、若い人たちに伝えておきたいと考えています。常任運営委員会ではいままでに、古賀行義先生、小熊虎之助先生にお話を頂きました。今日、増田幸一先生をお迎えし、第3回目の会を開くことになりました。増田先生は近年、『私の職業遍歴——応用心理学者の回想』(琵琶書房、昭和52年) を上梓されておられます。

皆様もよく御存知の如く、増田先生は高等学校教授、東京市視学、文部省調査課長、神戸大学教育学部長、大阪大学教授、をおつとめになられ、日本全国の応用心理学関係の先生がたとも親しく、顔の広いお方たでいらっしゃいます。本日は、若い頃の大学の話とか、友人のお話を御気楽にお話し頂きたいと思います。

増田(幸一) ただいま堀内先生から御紹介ありました  
が、応用心理学会の初期の頃については当学会の機関誌『応用心理学研究』の1号で古賀先生がくわしくお話を  
なさっておられるとおりだと思います。私は応用心理学会  
と縁が深いのですが、学会成立の沿革についてはよくわ  
からないのです。前に日本大学の渡辺徹教授が生存中、  
くわしい話をおききしようと思ったのですが、果せませ  
んでした。ただ東京では、「応用心理学会」という名称  
で始めたということは知っていました。その後、神戸・  
関西の方面に「関西応用心理学会」ができ、戦後それが  
合併して「日本応用心理学会」になったわけです。とい  
うことだけは判っているのですが、いま申しました肝心  
の東京方面の始まりから私の知っていることまでがよく  
判っていないのです。

従って、そういうことはこの前の古賀先生のお話を補

充せよということですが、それはできませんし、今日は  
考えておりません。ただ私としての、応用心理学者としての職業遍歴、キャリアとその理論的関係、現場  
での指導などの経験をお話ししようと思っています。先  
にも御紹介ありましたように最近私は『私の職業遍歴』  
という本を書きました。この本の副題には、一応応用心理  
学者の回想とありますが、まず私の簡単な経歴をお話  
します。

私は明治31年11月、東京神田の商店街に生れました。  
明治38年、東京高等師範付属小学校に入学しました。母  
は現在でいう“教育ママ”ではありませんでしたが、教育  
熱心でした。明治44年付属中学に進学、大正6年第一  
高等学校に入学しました。この頃既に心理学に興味をも  
っていました。それは一高時代、隣りの東大の法医学教  
室を会場として開かれていた「心理学通俗講話会」が面  
白く、毎月それをきいたことや、その頃創刊された「變  
態心理」という雑誌の刊行元が開催した「變態心理講習  
会」に休まず出席したことなどが心理学に興味をもった動  
機となりました。こうしたことがあり、一高では英法科  
でしたが、文学部心理学科に進むことにしました。な  
お、その年は全国の高等学校からの志願者がわずか4人  
でしたので、心理学科は無試験入学となりました。

大正9年東大文学部心理学科へ一緒に入ったのは、松  
井三雄・橋覚勝・留岡清男・三井透の4君です。これら  
1年生のほか、心理学科には、2年生に今田恵・齊藤重  
雄(後に岡本と改姓)の2氏、3年生には内田勇三郎氏  
1人だけで、合計でも7名という少人数でした。

当時、心理学科の教官及びその担当講義は、松本亦太  
郎教授「心理学概論」「智的作業」「心理学実験」、桑田  
芳蔵助教授「民族心理学」などでした。

3年のとき卒業論文で何をやろうかと松本先生の所へ相談にいったところ、先生が“君、この頃 mental test が研究されたり、試作されているが、この方面のことを行っている人がいないので、この分野でテーマを選んだらどうか”といわれました。そこで、卒業論文を「個人差の研究」individual difference をテーマにし、文献的な調査をし、それに基いたテストの実施などをやり論文をまとめました。これが応用心理学への進路を方向付けたことになります。そして大正12年に大学を卒業しました。卒業するとき、妙な縁があるのですが、卒業生の先輩である内田勇三郎君（先輩を君よわばりするのは変と思われるかもしれません）が、松本先生の演習にも一緒に出たりして、親しくしていたものですから、同級生の感じがします）。その内田君から彼が勤務していた財団法人協調会産業能率研究所をやめるので、その後任としてこないかという話がありました。

内田君と会い、同氏から協調会をやめる理由や同所での仕事を概要を聞きました。

私はもともと心理学の応用という問題分野に興味があり、また卒業論文に「個人差」に関する研究をまとめたこともあり、能率研究所での適性検査、産業疲労、作業研究などの仕事は面白ううなのでそれを引き受けました。当時、研究所は芝公園にあり研究所長は心理学の大先輩の上野陽一氏되었습니다。

研究員としての私の仕事は、適性検査 aptitude test や適材選抜 vocational selection を主とし、産業疲労、作業研究、科学的管理法などを副とした基礎研究と実地指導を行いました。

藤本(喜八) その頃、大学の卒業は何月でしたか。

増田 3月です。その後、協調会は財政事情から改組を行ない、その一環として能率研究所は大正14年3月に廃止されました。しかし、所長が予め画策していました。同年4月から「日本産業能率研究所」という名称の新機関が設立され、場所も所員も事業も変わらなかったので従来通りに活動ができます。

上野所長は明治45年以降、自宅を編集所として月刊誌「心理研究」を刊行していました。

編集を担当していた東大心理学科の先輩、岡本重雄氏から自分の後任として編集を引受けないかという話があり、所長の許可を得て大正12年6月からその仕事も担当しました。そしてこれは、日本心理学会の機関誌「心理学研究」が創刊された大正14年まで続きました。

大正14年3月、これも心理学科の大先輩の高橋穰氏から、従来岩波書店から刊行されていた『哲学辞典』のほかに『哲学小辞典』を編集・刊行する企画があるが、私

にその中の心理学関係の項目の編集を頼みたいがという話があり、これも所長の許可を得て週3日そのために岩波書店に行くことになりました。この仕事は、かなり頭を使うものでしたが、心理学一般にわたり復習する意味で有用でした。なお、大正14年には私の処女出版もある『適性検査法要領』が公刊され、松本先生から序文をお書き頂いたことも嬉しく思い出されます。

松本先生は大正15年、東京帝大を定年退官されましたが、心理学研究室が企画して『心理学及び芸術の研究』という大部な論文集が発刊されました。私はそれに「産業心理学の新傾向と其主要問題」と題するかなり長い論文を寄稿しました。

昭和2年4月、上野所長から突然、研究所の人員縮少のため、やめてくれとの申渡しがありました。全然予告もないこの通告に驚きましたが潔く身を引くことにしました。友人・先輩がたに就職のあっせんを懇願していた所、心理学の大先輩である田中寛一博士が東京市教育局の仕事をお世話を下さった。こうして、同年7月に「任東京市事務員」「兼任東京市講師」の辞令を受領し、東京市教育局に勤務し、兼務として東京市教員講習所の仕事をすることになったわけです。教員講習所では、心理学と教育学の2学科目の講義担当、現職教員に対する研修指導が主な業務であり、教育局での職務は、尋常小学校を巡回し、現場の学級担当教員に対し、学級経営で知能検査につき種々な助言を行ないました。いっぽう、尋常・高等小学校職業指導担当教員の指導や府・市職業紹介機関との連絡提携に関する業務もありました。

職業指導の面で申しますと、当時、東京には財団法人東京都社会事業協会が経営する東京都少年職業相談所と東京直営の東京性能検査少年職業相談所がありました。私はしばしばこの二つの職業相談所に赴き、緊密な連携を図りました。特に前者の豊原又男所長は、この方面の大先達として広く信望を集められており、私も同所長からいろいろと教えを受けました。

昭和3年2月には、大日本職業指導協会が発会式を神田の如水会館で行いました。理事長は田中寛一博士でしたが、私は最初から会員として加わり、研究部の委員に選任され、会務にも参画しました。

なお、昭和3年4月から日本大学が「個性指導講習会」を始めましたが、これは職業指導担任者の養成を目的とするもので、期間1年間、約540時間という長期の夜間講習で、講師には松本博士ほか40余名が依嘱されました。私もその一員として「精神検査法」を講義しました。

能率研究所との関係は、前にも申しましたように、昭和2年春一応絶たれましたが、その後も私自身の産業界での能率増進や適材選抜に関する興味は持続されていました。それで、上野氏の提唱によって結成されました全国各地域の能率運動団体の連合体である「日本能率連合会」の第1回大会が昭和3年10月に開催されたとき、その席上で「適性検査法の意義とその構成」と題する研究発表をしました。

そのうち、こうした職務にあきたらない気分が高まってきたので、心理学科の松本教授に転職の希望を申しました。すると幸いにもその頃、桑田助教授の所へ、広島高等学校から、心理学を担当していた丸山茲円教授が台北大学助教授に栄転することが内定していたので、その後釜に誰か適任者を推薦してくれという話がきていることを先生から聞きましたので、早速桑田先生に会い就任のあっせん方を懇請しました。こうして、昭和4年3月末に講習所を退職し、4月から広島高等学校教授として赴任しました。途中、京都で下車し、偶々京都大学で開催の日本心理学会年次大会に出席して研究発表を行いました。広島高等学校での担当科目は「心理」と「独乙語」でした。授業時間は週12時間でしたから、自分の専門分野の研究に当てる時間は充分とれました。それで種々の問題をとりあげて、それを論文にまとめ、日本心理学会、関西応用心理学会（戦後、関西心理学会と改称された）などの大会で発表したり、寄稿したりしました。

広島には明治時代に創設された広島高等師範学校がありました、私が赴任した昭和4年度から広島文理科大学が設置されました。この両校には、東大心理学科卒業の先輩がおられましたが、そのお1人に、東大在学中にメンタル・テストの講義を聞いた久保良英氏が広島文理大教授になっておられました。私は広島在任中、ずっと毎週一回同教授の研究室へ行って教えを乞い、また毎月一回同大学で催された心理学談話会の一員に加えてもらいました。こうして、念願の高校教授になれましたので、在任中に何か一つのテーマを選びその研究に打ちこむことを決意しました。これまでの産業心理学者の誰もが手をつけなかったテーマを選ぶのが、自分の研究と学界への貢献を果すことができると思って、「作業単調感」の研究を論文の主題としてきめました。論文作製にあたっては、まず内外の関係文献を収集閲読し、次いで調査・実験を企画しました。当時文部省では、「精神科学奨励費」という研究助成金を設けていましたのでそれを申請し、研究奨励費をもらうことができました。工場従業員の実態調査は、帝国人造綿糸株式会社岩国工場や簡

易保険局、専売局広島工場などで行いました。戦後も単調感の実態調査を再開し、昭和35年にはこれまでの研究結果を集成し、「作業単調感の研究」という論文を完成しました。

その後、広島高等学校では校内で紛争があり、それに厭気がさしていました。昭和7年9月、東京の日本大学の渡辺徹教授から書面がきました。その文面は、今度東京市が市域を大拡張するにつき、教育局の視学を大幅に増員することになったので、その1人に君を推薦したが東京に帰ってくる意志はないか、というものでした。広島高等学校をやめることについては苦慮しましたが、結局東京へ戻ることにしました。こうして、昭和7年12月に東京市視学になりました。視学の任務は担当区内校長・教員の人事管理と教育指導などありますが、かなりの激務でした。しかしながら、その間を縫つていくつかの専門活動も行いました。それらを列挙しますと次のよう�습니다。①日本心理学会の会員として、東大で開催された年次大会に出席しました。しかし、地方大会の方は勤務の関係で行けませんでした。②同じく東大で毎月行なわれていた心理学談話会には、努めて出ました。

このような東京市視学の仕事も、昭和9年には退職することになりました。この原因は、教育局における不詳事件のとばっちりから起きたもので、小学校校長への転出をすすめられましたが、自分の性に合っていないことで辞退しました。数か月間浪人しましたが、幸い9月には、大日本職業指導協会主事に就任することができました。ここでの仕事は、職員の指揮監督や職業指導の普及発展、研究調査などあります。事務的かつ多方面的な用務に毎日追われましたが、その間に専門活動にも許される限りの時間をさきました。

日本心理学会、応用心理学会に出席し、研究発表を行ないました。

応用心理学会は、私の広島在住中に結成されたものですが、広島から帰京直後、その会員となり、年次大会にも出席しました。応用心理学会は日本大学の渡辺徹教授の提唱により結成されたもので、本部は日本大学の心理学教室に置かれていたと思います。渡辺教授は創設にあたり、これは東大を主軸とする日本心理学会が心理学の理論面を重視するのに対し、特に応用面に力をいれるものである点を強調されたと聞いています。私はこの応用心理学会の常任運営委員に選任され、会の運営にも参加するようになりました。

そのほか、昭和9年には日本職業指導協会が東京支部との共同経営で、東京市内の二つの尋常・高等小学校

(竹芝尋常・下谷高等)に設置した職業指導相談所の顧問をも引受けました。

そうこうしているうちに、私自身の気持の中にもう一度官職、できれば教職に戻りたいという念願が高まってきました。内田勇三郎氏の紹介で、文部省の小川督学官よりすすめられた旅順の工科大学へ転職することを決意しました。昭和12年4月、旅順工科大学の学生主事として赴任しました。旅順工大では2年間を送り、昭和14年に再び内地へ戻ってきました。新しい職務は、文部省の教育調査部調査課の事務官です。ここでは、国内・国外の教育状況の調査、入学者選抜制度の改善などが主要な業務内容でした。昭和17年末に文部省の機構改革があり、教育調査部が廃止され、調査課は新設された総務局に包含されることになりましたが、私は従来通り調査課事務官に留任しました。

ところが18年5月、内閣が各省に官吏減員を命じたとき、文部省では調査課事務官に白羽の矢を立てましたので、私は職をやめなければなりませんでした。しかし幸い文部省が首切りをせず、私を官立東京高等農林学校教授してくれましたので、それが本職となりました。けれども私は調査の仕事に多大な関心をもっていましたので総務局長に善処方を懇請しました。これが受け入れられて、調査課の方は嘱託として残してくれることになりました。そして、3日は東京高等農林学校に通い、後の3日を文部省で過ごしました。

終戦後、昭和21年12月文部省に機構改革があり、新たに調査局が設けられ、同局に審議課、調査課、統計課の三つが置かれることとなりました。私はその調査課長として東京高等農林学校から呼び戻されました。調査課としての仕事には、国内・国外の教育事情の調査、地方や直轄学校の学校調査の指導援助、調査資料の収集、調査結果報告書の刊行などがありました。そうこうしているうち、昭和24年1月に新制の神戸大学の田中保太郎学長が、同氏の中學時代の級友である淡路圓治郎氏の名刺をもってきて、神戸大学の一学部である教育学部の学部長に来てくれないかという要請をもってこられました。この要請については、種々迷いましたが結局それをうけ、同年6月に神戸大学に赴任しました。

神戸大学では学部長を2年間つとめ、その後は教授専任として、教育と研究に打ち込むことができました。

昭和28年には、「日本教育心理学協会」が設立され、その評議員となりましたが、その後同協会が「日本教育心理学会」となっても、評議員の仕事は続けました。

当時、関西には「関西教育学会」と「関西心理学会」がありました。来神してすぐ両会の会員となり、大会

ではしばしば研究発表もしました。そのほか、大阪大学医学部の堀見太郎教授を初代の会長として設立された「臨床心理学会」がありましたが、これは心理学者と臨床医学者の協力によって運営される異色のある学会で、私はこれにも入会し、理事の一員になりました。同学会の会員には、学者・研究者のほか、臨床心理学の理論や技法を応用する現場で働く実際家も多くいましたので、時折その現場を視察したり、討議をしたりする機会がありました。

そのほか、関西学院大学では阪神在住の心理学関係者に呼びかけ、「阪神心理学読書会」を月一回開催していましたし、また、神戸には心理学出身で神戸市教育研究所長の黒橋条一氏が「兵庫教育・心理研究会」を設置していました。私はこれら二つの会にも入会し、その会合に出席しました。

昭和30年秋、当時近畿大学小・中学校長でもあった心理学科出身の大先輩である檜崎浅太郎教授が来宅され、今度同大学で「職業科学研究所」と付設適性相談部の設置が決定したので、その創建の仕事を引き受けくれないかという依頼がありました。私は職業科学というきわめて耳新しい名称といい、その実践活動としての適性相談の仕事といい、すこぶる魅力的かつやり甲斐のあることのように思われましたので、その依頼を承諾し、毎週一回同大学に行き、創設事務を手伝いました。昭和33年4月には、懸案の専任所員に広井甫氏が就任し、研究および相談の活動はようやく本格的な軌道にのりました。

この間に、昭和28年7月半ばから8月終りまでの約1か月半、沖縄のアメリカ民政府が計画した内地大学教授団による琉球の小・中学校教員の認定講習に参加したことでも懐しく思い出されます。私は沖縄本島の名護町に滞在し、約10か町村の教員に「児童心理学」と「青年心理学」を講じました。

29年1月には、大阪大学助教授で、東大心理学科での級友であった橘覚勝君から、同大学教育学部長で教育心理学講座の主任教授を兼ねている桑田文学部長が退任されたので、その講座の後釜に推薦したいという話がありました。

同学科には大学院も置かれており、研究の面にも充分な時間と労力を注げるという利点などを考えて、この話を引受けることにし、昭和32年4月から大阪大学の文学部に転任しましたが、阪大に移ってからは、授業時間と学生の指導の軽減で時間と労力にかなりの余裕が出るようになりました。そこで、昭和5年以来行なってきました作業単調感に関する研究の総まとめを論文にして、これを阪大文学部に提出しました。これが教授会の審査を

パスし、37年2月に赤堀阪大総長名による文学博士の学位記を受領しました。阪大には、63歳の定年退職時まで在籍しました。

昭和37年4月からは、新設の成蹊大学工学部経営工学科の教授に就任することになり、13年ぶりに帰京しました。工学部では専門教育課程で「産業心理学」を、一般教育課程で「心理学」を担当しました。しかし、成蹊大学工学部教授も満65歳で定年になり、その後は非常勤講師として勤務し、昭和40年4月からは大妻女子大学家政学部教授となりました。大妻女子大学には50年3月末まで勤務しました。

以上で私の職業遍歴の話を終りますが、学会活動などの点を若干補足しますと、次のとおりです。

昭和37年には応用心理学会の常任運営委員に選任され、また日本心理学会が設置した「心理学長期計画委員会」に応用心理学会代表委員として出席しました。同年から応用心理学会・相談部会の運営委員となり、39年には「相談学将来計画委員会」の委員長となり、同相談部会が発展的解消をし、「日本相談学会」を創設するための礎石を築きました。また昭和39年度に文部省の管下に「財団法人能力開発研究所」が創設されましたが、私は顧問を委嘱され、同所の適性テスト・学力テスト・職業適応テストの作成と実施に関し助言をしました。

42年6月には日本相談学会の創立総会が東京教育大学で開催されました。同学会は、カウンセリングの問題がこれまでもっぱら心理学の領域で研究されてきましたが、もっと広く教育・宗教・福祉・医療・労働・経営・政治などの領域をも包含するものでなければならないという新しい理念を基とし、いわゆる相談学 Counseling Science の研究と実践を推進する目的をもって発足しました。

そのほか、アメリカ・ガイダンス協会(APGA)および国際応用心理学会(IAAP)には引き続き会員になっていましたが、48年にはAPGAの名誉会員(Emeritus member)たることを認められ、49年には日本応用心理学会、50年には日本相談学会で名誉会員に推挙されました。

最後に、海外渡航のことについてお話しておきたいと思います。第1高等学校時代、約1か月半朝鮮・満洲・支那を巡回する旅行団の一員として長期間の海外旅行をして、万里の長城、孔子廟などを訪ねました。戦後は、昭和25年から26年にかけ、アメリカ政府の招請でアメリカ各地の大学・ハイスクール・特殊職業教育施設などを視察しました。昭和28年に沖縄に行ったことは先ほど述べたとおりです。昭和36年8月から9月にかけて、デン

マークで国際応用心理学会大会が開催されたのを機会として、ドイツ、イタリー、フランス、英國を廻り、帰路米国の数都市を訪問してきました。コペンハーゲンでの大会では、“Cooperative Study on Vocational Development on the Adolescent in Japan”という論文を発表しました。また、昭和41年には、ソ連のモスクワで開催された第18回国際心理学会議に出席し、“A Study on Monotony in Work: A Comparison of Prewar and Postwar Industrial Workers”を誌上発表で行ないました。

以上で私の話を終ります。あとは皆さんからの御質問にお答えすることにしたいと思います。ただ私は耳が遠いので、できるだけ大きな声で質問して頂きたい。

**堀内** 私はたまたま先生の後輩にあたりますが、昭和12年に大学を卒業して文部省に御厄介になりました。その頃既に増田先生はおられましたね。

**増田** 何課におられました?

**堀内** 私は教学局におりました。小川義章さんのお名前が出て、懐しくお聞きしました。教学局といって、外局なのです。

**藤本** それはね、例の思想善導ということと関係があるのですよ。教学刷新という時代ですよ。

**増田** そうですね。戦後のページのときは、教学局の幹部は全部公職をやめさせられましたね。

**堀内** 私は卒論で知覚関係のことをやったのです。しかし文部省ではそれができないのです。社会教育局に坂本越郎という心理学者がいまして、彼が「読書の興味の調査」をやったのです。それが資料ぼう大でして、たくさん残っていたのです。それを私が集めて整理して、「読書の興味の発達」を発表するために昭和17年に日本応用心理学会に入ったのです。

日本心理学会には、その前、高木先生にすすめられて、論文をのせてくれるということで卒業した12年に入党しました。

**藤本** 増田先生、卒論で個人差の研究をやられたということですが、それは1923年ですので、アメリカのArmy testの資料、dataは当時既に手に入っていたのですか。

**増田** もちろん、そうです。Army testのこともあります。なんなら、草稿はいまも持っていますので、お目にかけてもよいです。

**藤本** 広島に先生が行かれましたのは昭和4年から?

**増田** 昭和4年から8年までです。

**藤本** たしか労働科学研究所で関西応用心理学会が開かれたのは、昭和9年だったと思いますが、そのときは

お越しになられましたか。

増田 ええ行きました。そのとき始めて桐原先生におめにかかったのです。あそこの研究所と工場をみせてもらいました。

藤本 ちょうど、私はそのとき労研に入っていたのです。労研に入って1年目に学会があったのです。昭和9年に労働科学研究所に入りました。桐原先生は昭和8年にヨーロッパへ留学されていて、私が入った9年にお帰りになったのです。ですから、私の最初の学会になります、その会は。

増田 ああそうですか。関西応用心理学会のおかげで、あちこち色々な所へ行きましたよ。名古屋で開催された時は大須観音に泊りました。あそこは心理学科卒業の大槻快尊という方が住職でおられましてね。

藤本 それから、宇都宮仙太郎さんもあその方です。

増田 そう、名古屋のね。

藤本 東京で関西と関東が合同して応用心理学会ができたとき、淡路圓治郎先生はずっと産業心理学をおやりになっていて、応用心理学と縁が深かったのですが、あまり学会においてになられませんでした。そのへんの事情を先生は御存知ですか。

増田 よく知りません、淡路先生がこられなかったというのは、いつ頃ですか。

藤本 いや、関東と関西が合併して応用心理学会となつたときです。

増田 終戦後まもなくですね。さあ、どういう事情があつたのでしょうか、よくわかりません。

藤本 産業心理学の方面では、増田先生の前にどういう方が研究をおやりになつてましたか？

増田 淡路さんですね。

藤本 それから？

増田 桐原さんですね。

藤本 石井俊瑞さんなんかはどうですか、産業心理学に入りますか？

増田 そういうれば、寺沢巖男さんなんかもおられますね。寺沢さんは電信・電話の研究をやっていましたね。石井さんは逓信省じゃないかな？

藤本 それから？

増田 そうね、そのほかまだおりますよ、現場でやつた人々は。僕は産業心理学の講義ではこういう話はよくふれるんだが……あと誰がいたかな。テストでは、安藤謙次郎さんが早いですよ。横須賀の海軍工廠でやっていました。あの人は器用な人でね。テストの器具をいろいろ考案しましたが、我わがが能研でドイツから取寄せた

器具などとよく似ているので驚きました。あの人はドイツ語ができるわけではないので、文献で調べたのではないと思いますが、非常によく似てました。本当に独創的な人でしたね、あの人は。

藤本 上野陽一さんはどうでした？

増田 上野さんは非常に行政的能力がありましたね。さきにもお話ししたように、協調会が財政的事情で改組を行ない、「産業能率研究所」が廃止されましたが、上野さんはちゃんと次の「日本産業能率研究所」を用意されてまして、場所も事業も前と同じように活動することができたわけです。

藤本 お若い方は御存知ないでしょうが、協調会といるのは第1次大戦直後、労使紛争を予防するという立場でできた、労使協調を建前にするという意味で、今までいう特殊法人団体なのです。

増田 そうです。最初は労資協調会といっていたのですが、「労資」という字を取ってしまったのです。目ざわりだったのでしょうね。

藤本 そう、そして協調会の所管にさきほどの「産業能率研究所」や「労働学校」があったのです。

増田 あっ、そうでしたかね。学校がありましたか。

藤本 そうなんです。その労働学校は戦後法政大学の社会学部に図書などと一緒に吸収されたのです。大河内一男も若い時分、そこで随分教えたそうですよ。ですからいまの法政大学の社会学部は協調会の労働学校と、現在の労働科学研究所の前身である「大原社会問題研究所」の財産とその両方を引取ったのです。

永丘(智郎) 藤本先生、いまのお話は少し不正確です。協調会の労働学校は戦後、「中央労働学園大学」になりました、それが法政大学の社会学部に移ったのです。

藤本 ああそうでしたね、ワン・クッションにおいて法政大学へ移ったのでしたね。

永丘 それから大原社研は別です。法政の中で分れていまだに存在しているのです。

藤本 そうでしたか。私の記憶がちょっと不正確でした。訂正します。

永丘 増田先生、先生は松本亦太郎先生を通じてヴァントの孫弟子になると思うのですが、ヴァントのことについて何か聞かれていましたか。

増田 とにかく松本先生はヴァントの直弟子ですね。講義やノートについても、もちろんヴァントのことが中心ですね。講義の中に英語の文章がしばしば出てくるのでノートをとるのに閉口しましたよ。

永丘 西周のことはお聞きになりませんでしたか。

増田 誰？ ああ西周さんね。さあ別に。私は文献で

知っていただけです。あの人の本持ってたかな？

藤本 そう？ 松本先生はヴァントの弟子になるの？  
あの方はアメリカに留学されたのではなかったの。

堀内 アメリカへ行ってから、ライブチヒに行かれ、  
そして実験心理学をやられたのです。

堀内 先生の一校時代でしたか、「通俗心理学講話会」  
は。あれは本になっていますね。

古本屋で5冊あるなかで、1冊欠本になっているのを見たことがありますよ。

増田 そうですか。あれは上野さんが作った本です。  
とくに、あれで変態心理学に興味をもったのですよ（笑  
い）。

一同（笑い）

増田 そう、あの講習会には皆勤しましたね。いまだにノートをもっています。この会については面白い話があります。当時、中条百合子さん——今の宮本百合子さんですね——が紅一点でその会にきていました。中条といった医学博士の娘さんです。

それから、裏話があるのです。さきほど戦後の頃の文部省の話をしました。教育調査局ができたことについては、アメリカさんの援助もありましたが、私たちも活動したのです。アメリカ人とは別にですよ。戦後、第二代の文部大臣になられた安倍能成氏に調査部局を復活してもらうことを懇請したのです。安倍さんとは広島へ行く車中でよく一緒になったので、懇意にさせて頂いていました。

調査担当部局の機構を挽回するため、文相に陳情してみようということになり、このことをお願いしてみたのです。安倍さんは私の話に耳を傾け「考えてみよう」と答えてくれました。しかし安倍さんの在任期間は短かく、その数か月後に辞められました。そのとき、「自分の在任中に君の希望は実現できなかったが、次官によく話し、頼んである」といってくれました。その後、調査局が設けられ、同局に審議課・調査課・統計課の三つが置かれ、私は調査課長に就任したわけです。

堀内 先生御承知と思いますが、いま調査局というのは文部統計を一手に引受けましてね、コンピューターももっています。全国調査も前は3年ぐらいかかりましたが、いまは翌年発表が出るようになっています。それから「教育と情報」という雑誌を出しています。

増田 次は少し私的な話になりますが、僕は酒好きなんですが、いろいろな職場で酒豪に会い、よくその人たちと飲みに行きました。

堀内 先生は28年に沖縄に行かれましたね。私は昭和30年に沖縄に行き、知念で1か月近くいました。名護へ

行ったとき、先生がよく飲まれたことを聞きました。

増田 どこから聞きました？ 先生から？ でも悪いことはしていなかったんですよ。

また私は音楽が好きでね。自分ではやりませんが聞くのが大好きです。母が家で近所の女の子たちに稽古をつけていたのです。長唄と琴と二弦琴を教えていました。その稽古を勉強しながら隣室できいているうちに曲や歌詞を覚えてしました。高等学校時代には、友人に洋楽のレコードをたくさん持っている者がいたので、その友人にきかせてもらい、西洋音楽に馴染みました。こうしたこと、アメリカへ行ったときも、フィラデルフィア交響楽団の演奏をきいたり、シカゴではカルメンの歌劇などをみました。コペンハーゲンのIAAPの大会に行ったときは、ローマで「アイーダ」をきましたし、モスクワでの国際心理学会に出席したときは、ボリショイ劇場にパレードを観に行ったりしました。本当によかったです……。

太田垣（瑞一郎） ほかに何か先生におうかがいすることはありませんか。

永丘 先生は日本の応用心理学の研究をずっとやってこられ、職業的にもいろいろな経験をなさってこられたことはよくわかりました。外国の場合は、社会的ニーズとして日本より応用面の研究が早くから開拓されたと思いますが、先生がお考えになられていかがですか。先生のお話をうかがっていますと、ずい分御苦労なさってこられた感じがするのですが、この点は如何でしょうか。

増田 そうですね。コペンハーゲンの国際応用心理学のとき感じましたが、向うの方がずっと進歩していますね。やっぱり、日本はまだまだだと思いますよ。それからこれは裏話ですけれどもね。とにかく大会の発表は英語でしゃべらなければなりません。

自宅で練習するだけではなかなかうまくいきません。神戸大学の学長に相談した処、幸いにも、最近アメリカから帰ったばかりの経済学部の教授がおられるのでその人に相談したらというのでした。早速その教授に頼み、特に発音を主とし、会話の指導をしてもらいました。そのために非常に助かりました。それでも、シカゴに行ったとき困惑したことを覚えています。地下鉄で目的地に行き、帰りに切符を買おうとしたのですが、自分の発音が相手に通じないでまったく困りました。外国にいらした方は、同じような想い出があると思います……。

太田垣 それでは、時間ですので、このへんで終りたいと思います。増田先生どうもありがとうございました。

### 編集者あとがき

1979年4月2日、慶應義塾大学三田において開催された、日本応用心理学会常任運営委員会のあと、増田幸一先生をお招きし、応用心理学会のお話を伺いした。冒頭にも述べられておられるとおり、創成期の頃のお話はあまり出なかつたが、応用心理学徒としての御経験や何回かの転職経歴のことなどは貴重であると思われたので、古賀先生のお話を引き続き、「日本応用心理学会のあゆみ」(その2)として掲載させて頂くことにした。実際のお話は、ここに掲載されているものの何倍にもなるが、紙面の関係で割愛させて頂いた。先生にお詫び申しあげたい。また、お話の内容のこととて先生から学会に御寄贈頂いた御著書『私の職業遍歴——応用心理学徒の回想』(琵琶書房、昭和52年)から、かなりの部分を引用させて頂いた。あわせて感謝申しあげる。